

〈黄帝と老子〉雑観 第14回

天数を修める者は三、五に通ずべし

『黄帝内経』の謎を解く鍵は数術にある (その2)

『黄帝内経』 研究家 松田博公

ツイート 2

いいね! 4

第9回 [天地人三才思想の源流は黄老文献にあり](#)

[『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ \(その3\)](#)

第10回 [天道は循環し、経脈も循環する](#)

[『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ \(その4\)](#)

第11回 [王の治身が治国の本である](#)

[『黄帝内経』と黄老の「治身治国」思想 \(前編\)](#)

第12回 [『黄帝内経』の身体国家論の完成と風化](#)

[～『素問』靈蘭秘典論から『靈枢』師伝篇、外揣篇へ](#)

[『黄帝内経』と黄老の「治身治国」思想 \(後編\)](#)

第13回 [天の聖数が繋ぐ万物感応のネットワーク](#)

[『黄帝内経』の謎を解く鍵は数術にある \(その1\)](#)

『黄帝内経』（現存『素問』『靈枢』の便宜的な総称）を理解するには、数術を知らなくてはならない。しかし、そのような『内経』研究は、日本ではほとんど関心を持たれてこなかった。では、中国ではどうか。中国でも歴代の『内経』注釈、あまたある中で特に数術に視点を据えたものは管見に入らない。この領域を新たに切り開き、『内経』思想の宇宙論的な深みに至ろうとする試みは、台湾の医史学者、李建民の著書『死生之域—周秦漢脈学之源流』（台北：中央研究院歴史語言研究所，2000）や重慶医科大学中医薬学院の中医師、卓廉士の最近の仕事のほか、まだ多くはないのが現状である。（李建民の著書は、『発現古脈—中国古典医学与数術身体観』という題の修訂版が中国で出ている。社会科学文献出版社，2007）

卓廉士の存在は、日本内経医学会の荒川緑先生から教えていただいた。荒川先生は、慧眼にも卓廉士の論文「古代数術から見た経脈の長さや営気の流注」（『中国針灸』2008年8月第28巻第8期）に着目し、翻訳しておられたが、その訳文を提供して下さったのである。この論文の中で卓廉



今週号のPRの部屋はこちら

- “女性治療家”のための『エステ・ワークショップ』（3月、4月開催）
- ペーパー鍼灸師『脱出』講座 入門編【無料】

■ヒューマンワールドのセミナー

- [クリニカルストレッチセミナー](#) (2015/4/19)
- [「超楽トランスファーテクニック」セミナー](#) (2015/3/21)
- [あはき師のための在宅ケア実践セミナー](#) (2015/3/22)
- [変形徒手矯正術セミナー](#) (2015/6/7)

★ヒューマンワールドの本なら→→→→→ [こちら](#)

★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

士は、「経脈の長短寸尺と営気の流注度数は、いずれも数術から演繹されたものであり、目的は天人間の密接にして不可分な感応関係を建てることであった。数術を証明するすべがない以上、営気の流注に関する研究についても、実証科学の方法を採用するのはふさわしくない」と述べている。（上記を含め同論文からの引用は、基本的に荒川先生訳を踏襲する）

前回お読み頂いた読者にはお分かりのように、「数術から演繹されたもの」は、たくさんある。というよりも、数術を使って天地宇宙から人体内部まで、網の目のように繋ぐのが『黄帝内経』の戦略だから、三陰三陽、十二経脈、五蔵六府、三部九候脈診など、人体図式の細部はすべて数術から構成されている。それらは現代的意味での実数ではない。わたしたちが『内経』を読む場合、経脈12本は臨床経験から得られた実際の数で、経脈の寸尺は実測値と考えているとしたなら、それは錯覚だと卓廉士は切り込んだのである。

中国の研究者の優位点は、『内経』と同じ精神世界にある古代の思想書を、理解の傍証に使う知的な伝統を身に付けていることである。その際に引用されるのが、この連載で検討してきた『黄帝四経』であり、『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』といった黄老思想系の文献である。卓廉士も、自らの数術への着眼点を補強するために、董仲舒の『春秋繁露』同類相動篇から、「感応」という概念を引き出している。

■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。

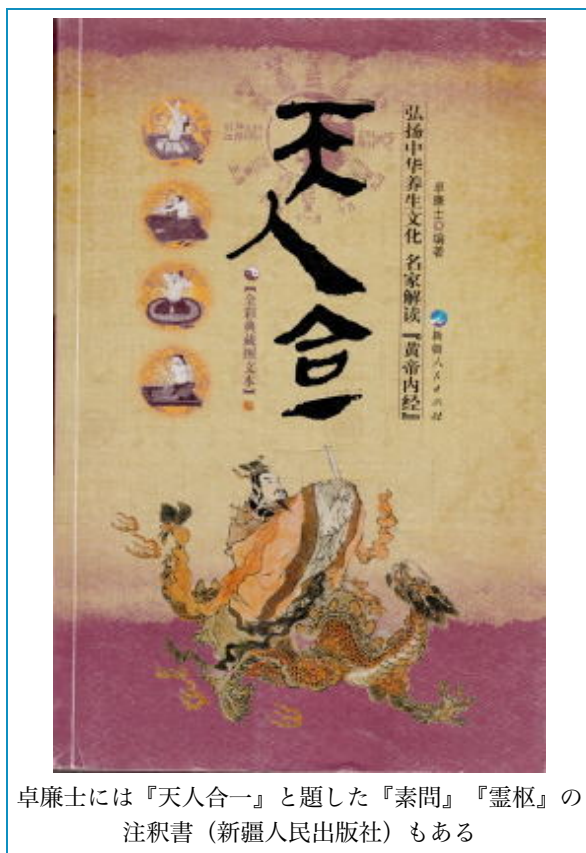
★詳細は»» [こちら](#)

★メディカル求人天国

鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は»» [こちら](#)

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は»» [こちら](#)



卓廉士には『天人合一』と題した『素問』『靈樞』の注釈書（新疆人民出版社）もある

「氣同じければ則ち会す。声比すれば則ち応ず。其の驗、噉然（きょうぜん）なり。試みに琴瑟を調して之（これ）を錯せん。其の宮を鼓すれば則ち他宮、之に応じ、其の商を鼓すれば而（すなわ）ち他商、之に応じ、五音比して自ら鳴り、神有るに非ず、其の数、然ればなり」

（気が同じであれば会合する。音声と同じであればお互いに感応する。そのしるしは明らかである。こころみに琴瑟を調節して演奏してみよう。宮音を奏でれば、その他の宮音もこれに感応し、商音を奏でれば、その他の商音もこれに感応し、五音は自ら音を出す。神がそのよ

うな現象を作り出しているのではない、数がそのような法則性をもたらし

ているのである）

前回、未開社会の人々は万物が融け合い浸透し合っているという「融即（ゆうそく）」の感覚から数を捉えていたというフランスの人類学者、レヴィ・ブリュルの説を紹介した。こうした新石器時代にさかのぼる感覚を、漢代の儒家、董仲舒は、楽器の共鳴現象を例に挙げて古代中国的に語っているのである。気が同じものは類が同じであり、数が同じであるものは相互に感応する。気＝数＝感応は法則であり、何ら神秘ではない。この董仲舒の言明を受けて、卓廉士は数術＝感応論を展開する。

「数術は、[『内経』が語るように] 天地間の「常数」あるいは「至数」であり、それと宇宙本体の間には不可知の天然の連繋が存在している。およそ数術に合することは、天地陰陽の運動が保たれていることと一致し、道と合し、このため森羅万象がいかに千差万別であろうと、数術を考察すれば、同じ気類の事物では、その数の多少によって、分類し説明することができる。

『素問』陰陽離合論篇は「天は陽爲（た）り、地は陰爲り、日は陽爲り、月は陰爲り、大小月三百六十日、一歳を成す、人また之に応ず」という。「之に応ず」とは、[『春秋繁露』の「之に応ず」と同じく] 感応のことであり、天人間には、数術を同じくする事物として、相互浸透・相互資生・相互助長の傾向が存在し、このため数をもちいて天人陰陽の関係を説明し、天体の運行と人体経脈気血の運行の密接な関係、利害の一致を見ることができるとのみならず、「陰陽の変、それ人に在れば、また之を数えて数うべし」（『素問』陰陽離合論篇）である。すなわち、数の多少によって、臓腑・陰陽・経脈・気血の間の複雑な関係を整理することができると考えたのである」

◇一、二、三、四、五、六、九の意味

数は、万物を区別しながら宇宙に繋ぐ。だから、数は天が与えた「天数」として聖化された。一つ一つの数は孤立せず、お互いに感応する。五は他の五と繋がり感応し、六に繋がり感応し、六は十二に繋がり感応する。同様に三は五に繋がり感応し、六に繋がり感応し、九に繋がり感応する。個別の数（一、二、三、四、五、……）を意識することは、個別の源であり総和である宇宙、すなわち「一」に繋がり感応することであった。従って、『内経』の数術とは、天地宇宙の運行と経脈・蔵府を流れる気血の運行の感応関係を確認する天人合一のわざなのである。

同論文で、卓廉士は丁寧にも、古代数術における基本数一、二、三、四、五、六、九の意味を解説している。これらの解釈は、卓廉士の独創というより数術を考察する場合の常識であり、『内経』を読む際には踏まえなくてはならない。煩雑に思えるかもしれないが、捕捉を加えつつ紹介しておこう。

【一は宇宙の本源である】

『説文解字』卷一上に「一、惟（こ）れ初め太始。道、一に於いて立ち、天地を造分し、万物を化成す」とある。古代人は、「一」を宇宙の本源とみなし、「道」の体現であるとした。そのため、「一」は「大一」「太一」（あるいは「泰一」）と認識され、祭られ、崇拜された。

『素問』移精変気論篇では、刺鍼時に神を守り、「治の極は一に於いてする」ことを強調している。医者と患者の神気が合一することが最も道に合ったことであり、最もよく治療効果を発揮できるというのである。

（医者と患者の神気は合一し、天地宇宙の気場と一体になる。小さな「一」から大きな「一」となる。医者が自らの神気を天地宇宙の気と「一」となるべく日常的に陶冶すること。『素問』宝命全形論篇では、それを「治神」と呼び、鍼灸家の第一に重要な心得とする。—松田）

【二は天地、日月、男女である】

『老子』第四十二章には「道は一を生み、一は二を生み、二は三を生み、三は万物を生む」とある。道の一は分かれて二となり、陰陽に判別されるので、「二」は陰陽を代表する。「陰陽和合して万物生まれる」

（『淮南子』天文訓）とあるように、雌雄が合して新たな生命を生み出す。

（陰陽は天地、男女の隠喩である。五行の木・火・土・金・水は天上の星の名前であるとともに地上の万物を象徴する。このことから陰陽論、五行論も天人合一思想であることが分かる。宇宙が生き活きとした動的平衡の運動体であるように、陰陽、五行の論理に貫かれている地上の万物も、変化し運動し続けてやまない生命体なのである。—松田）

【三は万物であり、すべてである】

老子のいう「三は万物を生む」は、三を三倍にして、生生として已まらず、千変万化して繁栄するということである。よって古代人は、「物は三を以て生じ」、「三」は万物化生の基であり、非常に重要な数字であると考えた。天地人三才は中国的宇宙の構図である。三の倍数である六・九・十二・二十四などは三の延長とみなされた。

（三陰三陽は、三本の陰経、三本の陽経であるにとどまらず、すべての陰経、すべての陽経を意味している。だから、経脈は三陰三陽で代表させることができ、それ以上を必要としない。—松田）

【四、五は宇宙の運行法則の四時、五季である】

四は四時（春・夏・秋・冬）の数であり、五行と配するために特に一季を増やして、あわせて五季とした。「春・夏・長夏・秋・冬」は、「生・長・化・収・蔵」の数に符合する。五は五行の「常数」であり、重要な基本数のひとつである。五の倍数である十・十五・二十・二十五・三十・三十五……と、三百六十五にいたるまで、「天地の数」とみなされる。まさにいわゆる「天地の間、六合の内、五を離れず、人も亦た之に応ず」

（『靈樞』陰陽二十五人篇）である。

（五行の色体表を思い起こすこと。世界の万物は五で分割されることによって繋がり互に感応する。「人の天道に合するや、内に五蔵あり、以つ

て五音、五色、五時、五味、五位に应ずるなり」『靈枢』経別篇—松田)

【六、九は三から生まれる至高の数である】

六と九は、三から生成されるのみならず、六は陰数であり、九は陽数であり、六と九の倍数である六六三十六と九九八十一は、みな特殊な意味を与えられた。

(九は至高の陽数であり、「万物」「すべて」の象徴である。八十一も同様である。「九鍼」は、あらゆる病態に対応できる鍼道具であることを九という数で示す。三部九候診の命名は、この脈診であらゆる病態、病位が診断できることを宣言する。—松田)

◇天と人が上下に交通する「三五の道」

これらの「天数」のうち、卓廉士が特に重要視するのは、「三」と「五」である。

「三と五は数術の基本数であり、数術は古代人の尊崇を受けて、「三五の道」と称された。『史記』天官書には「天数为爲(おさ)むる者は、必ず三五に通ずべし」といわれ、「三五」は宇宙時空の至数を内包していて、きわめて神秘的なものと考えられた」

「「三五の道」とは、天と人が「上」「下」に交通する道である。よって数術の演繹(えんえき)はつねに三五の形式による。古代人は「三を以て五に应じ」(『淮南子』天文訓)、三五十五、四五二十、五五二十五、六五三十、七五三十五、八五四十、九五四十五の数を得る。これらの結果を固定してある種の常数として、天人連繋の紐帯とみなした」

確かに、『内経』においても、三と五、その倍数は、出現率がきわめて高い。インターネットのデータベース「中国哲学書電子化計画」を検索すると、『素問』『靈枢』における数の出現傾向は、およそ次のようになる。(重複があるので厳密な実数ではない。)

「一」607、「二」506、「三」624、「四」448、「五」1024、「六」427、「七」168、「八」160、「九」212。「五」が最多であり、「三」はそれに次ぐ。『内経』で使われている語彙は、「氣」2951、「陰」1719、「陽」1892、「脉」1152などは別格だが、「天」582、「地」342、「虚」523、「実」248、「補」137、「瀉」211、「邪」439、「風」517、「肝」196、「心」521、「脾」236、「肺」304、「腎」293など、主なキーワードでも多くて500代に留まる。「脉」関連の語彙も、「経絡」43、「経脉」83、「血脉」43、「太陰」263、「少陰」271、「厥陰」159、「陽明」317、「太陽」287、「少陽」243の程度である。ここからも、『内経』の記述においていかに数術が重視されているかが理解できるだろう。

ちなみに、「三」には、三候・三部・三陰・三陽、その倍数では六氣・

六腑・病の六変・陰陽六経・情志の九気・形神の九蔵・頭部の九竅・鍼の九鍼・十二経脈・十二節・十二時・十二月などがある。

「五」には、五臓・五官・五色・五音・五体・五志・五乱、その倍数では「二十五陽」（『素問』陰陽別論篇）、「二十五変」（『素問』玉機真蔵論篇）、「二十五穴」（『素問』気穴論篇）、「陰陽二十五人」（『靈枢』陰陽二十五人篇）、「衛気は陰に行くこと二十五度、陽に行くこと二十五度、営周して休まず、五十にして復た大会す」（『靈枢』営衛生会篇）、「三百六十五節」（『素問』六節蔵象論篇）、「三百六十五絡」（『素問』針解篇）などがある。

こうした前提を周到に踏まえながら、卓廉士は、『靈枢』脈度篇の経脈の長さは数術の表現であり実測値ではないと、わたしたちの死角を突くのである。まず、脈度篇の文章を読んでみよう。

「手の六陽は、手より頭に至り、長さ五尺、五六三丈。手の六陰は、手より胸中に至り、三尺五寸、三六一丈八尺、五六三尺、合わせて二丈一尺。足の六陽は、足より上りて頭に至り、八尺、六八四丈八尺。足の六陰は、足より胸中に至り、六尺五寸、六六三丈六尺、五六三尺、合わせて三丈九尺。躡脉は、足より目に至り、七尺五寸、二七一丈四尺、二五一尺、合わせて一丈五尺。督脈・任脈はおのおの四尺五寸、二四八尺、二五一尺、合わせて九尺。凡そ都合一十六丈二尺、此れ気の大経隧（けいつい）なり」

ここに展開されている数に、いくつかの特徴があることに卓廉士は気づいている。

(1) 「足の六陽は、足より上りて頭に至る、八尺」という表現から、足六陽の長さを身長としていることが分かる。ひとの身長を八尺とするのは、「周制は八寸を以て尺と爲し、十尺もて丈と爲す。人の長さは八尺、故に丈夫と曰う」（『説文』）という周代の考えに従っている。(2) この八尺は、周代の1尺=8寸とする八尺で、十進法ではないが、経脈の長さには十進法を用いている。(3) 身長は男女、年齢で異なるが、天人感応の数術ではそれは考慮していない。(4) 何よりも、各経脈の長さが、足陽経が古代の八尺を取る以外はみな、三五の倍数になっている。

「手三陽経はそれぞれ長さ三尺五寸、足三陰経はそれぞれ六尺五寸、躡脉の長さは七尺五寸、任督二脈はそれぞれ四尺五寸である。これ以外に注意すべきは、手足陰陽経脈の差も三五およびその倍数であることである。足陽経と足陰経の差は、一尺五寸（ $8-6.5=1.5$ ）であり、手陽経と手陰経の差も一尺五寸（ $5-3.5=1.5$ ）であり、手足陽経の差は三尺（ $8-5=3$ ）であり、手足陰経の差も三尺（ $6.5-3.5=3$ ）である。数術は単位と小数は使わないので、上述の一尺五寸・三尺五寸・四尺五寸・五尺・七尺五寸は、それぞれ十五・三十五・四十五・五十・七十五と見るべきで、いずれ

も「三五之道」の数術に属している」

◇天數に違わない人体は健康である

さらに卓廉士は、ここにその他の数術形式が隠されていることも抽出している。

『靈樞』脈度篇は、『靈樞』五十宮篇と同じく、経脈の総数を二十八本としている。十二経脈が左右で二十四本、任脈・督脈が各一本、左右の蹻脈が各一本で、合計二十八本なのである。卓廉士がいうように、「二十八の数と合わせるために、衝脈・帶脈・維脈を捨てて論じない」。五十宮篇にはその理由が明言されている。「人の経脈は上下・左右・前後二十八脈、周身は（=二十八脈の長さの総計は）十六丈二尺。以て二十八宿に応ず」。天空に輝く星座・二十八宿と人体の経脈との感応関係を示すために数を合わせたのである。



また、五十宮篇には「天周は二十八宿、宿は三十六分、人氣の一周を行（めぐ）ること千八分」とある。天には二十八宿の星座が巡り、各星座は三十六分なので、天と感応する人体の気が巡る長さも一周が $28 \times 36 = 1008$ 、すなわち千八分だということである。「宿は三十六分」の意味は不明である。中国では、「各宿の間の距離は三十六分」という解釈が定説だが、『換個方法讀《内經》靈樞導讀』（中南大学出版社）の著者、劉明武は、『漢書』律曆志の記述に依拠して、古代人が各宿の間の距離を等しく三十六分と認識していたことはあり得ず、名だたる注釈家たちの定説は当たらないという。「三十六分」という数の出所もよく分からない。劉明武は、「360は円周の数であり、それと関係があるのだろう」と推測している。

ともあれ、卓廉士は、天の気と人の気は感応し同じ仕方で周行すると説くこの個所の「三十六分」「千八分」を、「経脈の総数は、 $[6 \times 6 = 36, 6 \times 6 \times 28 = 1008]$ のよう」に六六の天数を隠し持つ」と読解する。そして、『素問』六節藏象論篇の、「天は六六の節を以てし、以って一歳と成す。人は九九を以て制会する」という経文を取り上げ、経脈の長さには、六六だけでなく、九九の天数も絡むことを明らかにしている。

「『靈樞』脈度篇によれば、経脈は左右に各一、あわせて長さ十六丈二

尺 (81×2=162) であり、人体の片側の経脈は八丈一尺で、九九の数である。任・督の二脈はあわせて九尺 (4.5+4.5) であり、また「九九制会」の数に含まれる。「制会」には、制約・規範の意味があり、天と人の交流を実現するために、臓腑の気化や経脈の長さなどの生理指標はかならず九九の数の制約と規範を受けているということである」

『靈枢』脈度篇、五十營篇、『素問』六節藏象論篇などが示唆するのは、人体と宇宙とは、三、五、六、九、二十八といった聖なる「天数」によって繋がり感応しているということであった。そして、天地宇宙と繋がり感応している人体は、天数に違わない限り、健康を約束されているのである。そのためにも、蔵府や経脈の長さ、数は天数に合致しているべきであり、自由勝手に決めてはいけないのである。卓廉士は語る。

「数術と中医理論は密接に結びついており、分けることはできない。『靈枢』根結篇に「一日一夜に五十營し、以て五藏の精を營(めぐ)らす。数に応ぜざる者は、名づけて狂生と曰う」[人体の気は一昼夜に五十周して五藏の精気を全身に巡らす。天数に感応する数を体内に保持しない者は、狂い生じた者と呼ばれる]とある。古代人の観念では、数術を放棄して臓腑経脈と営衛の流注を論ずることなど、想像もできなかつたのである」

こうした卓廉士の数術論を読みながら、読者は、「五藏六府はなぜ五藏六府なのか」という問いを思い浮かべたのではないだろうか。鍼灸臨床においてわたしたちは『靈枢』経脈篇に結実する六藏六府説を使っている、にもかかわらず、鍼灸界だけでなく社会一般にも、「五藏六府」という決まり文句が定着している。この定型句が歴史的に強固に残ってきたのはなぜか。数術の歴史を文献的にたどりながら、今回は、その答えを探ってみよう。

ツイート 2

★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

HOME



[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [求人天国](#)
[株式会社 ヒューマンワールド](#)

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.